

# 珍敷塚古墳の蕨手文の解釈に関する一考察

—中国漢代羊頭壁画との比較から—

藤 田 富士夫

はじめに

1950（昭和25）年の採土工事で福岡県浮羽郡吉井町富永（現・うきは市吉井町）にある珍敷塚古墳の石室が破壊された。石室は、奥壁の大石1枚と右壁の腰石とを残してほとんど失われてしまったが、もとは長さ4m、幅2mの狭長な横穴式石室で、前室を有していたとされる。この古墳を有名にしたのは、奥壁に描かれた壁画であった。

奥壁は、幅2m、高さ1mの花崗岩で成る。壁画は、主題となる器物その他の図形を赤色の太い輪郭線で描いている。腰石にも、2個の同心円文が確認された（第1図-1・石室略側図）。壁画は、「中央に三個の大きな靱を書き上に大きく蕨手文がひろがる。片側に太陽・へさきに鳥が止まる船を漕ぐ人物を、もう一方の側に盾をもつ人物・蟾蜍・鳥などを描き、『死者の霊を死後の世界に送り、安住させようとする葬送儀礼の表現』と理解されている」と要約できる<sup>(1)</sup>。

珍敷塚古墳の壁画について、「大陸図文の要素の諸問題」の観点から検討した斎藤忠氏は、「珍敷塚古墳・竹原古墳の壁画の図文の中に大陸的な図文の要素が最も濃厚にあらわれており、これらに大陸の壁画古墳の影響がはじめて力強くしめられていることが考えられる」としたうえで、「図文としての蟾蜍・四神・馬とその手綱を執る人物などの形態や図柄は、高句麗の古墳壁画にもっとも近似している。その直接の影響は、高句麗にあったとみてよい」とした<sup>(2)</sup>。

一方、古代東アジアの装飾墓を総合的に研究した町田章氏は、装飾墓として名高い竹原古墳壁画とともに論じ、「竹原古墳の怪獣を龍とみたり蟾蜍を月の表現とみて何等かの形で大陸的な死生観が入り込んでいるとみることも可能かもしれないが、しかしその表現と中国系の装飾墓には程遠いものがあり、まったく別の死生観にもとづくものとみるべきである」とした<sup>(3)</sup>。

最近の研究で、西谷正氏は右端の円文の側に蟾蜍の表現があることに注目し、中国の古典『淮南子』に「月に蟾蜍あり」と記されていることから、「それを現実に絵として表現しているというものが、朝鮮・高句麗の壁画古墳にある」として、珍敷塚古墳の図文を高句麗との関わりでとらえている<sup>(4)</sup>。

このような論調に対して、白石太一郎氏は、「月の象徴としての蟾蜍や方位の象徴とし

ての四神についての知識を断片的に受け入れ、古墳の壁画の一部に取り入れているにすぎない。決して、中国や高句麗の人々の来世観や宇宙観を体系として受容したわけではないことを確認しておく必要がある」と体系受容に関して慎重な意見を述べる<sup>(5)</sup>。

筆者は珍敷塚古墳壁画の図文に関する研究の現状を学ぶなかで、その解釈上もっとも重要な視点が欠落しているように感じている。それは、中央に大きく配置され、だれもが本古墳図文の特徴としている「蕨手文」についてである。この重要な図文についての合理的な解釈がほとんど行われていないようである<sup>(6)</sup>。

珍敷塚古墳の図文を理解するには、まず、この「蕨手文」の謎を検討するところから始めなくてはならない。佐原真氏は、装飾古墳の図文解析の基礎的作業を通して、「特定画像の拡大」（大切な画像を大きく描く）、「特定部分の拡大」（大切な部分を大きく描く）などの特徴があるとしている<sup>(7)</sup>。前者の事例では、高句麗の安岳3号墳では墓の主人公は大きく、お付の人を小さく描いている。後者の事例では、円い表現のそばにヒキガエルを描く珍敷塚古墳の例は、月とその象徴とを合わせ表したものとす。本来、月をしめす円の中に描きこむべき蛙を、それでは小さくなってしまうので、外へとり出して大きく表現した結果である、としている。

佐原真氏の視点から言えば、珍敷塚古墳壁画の中央に大きく描かれた「蕨手文」は「特定画像の拡大」であり、「特定部分の拡大」の手法が用いられている。珍敷塚古墳図文の解釈に関わるキーワードはとりもなおさず「蕨手文」にある。

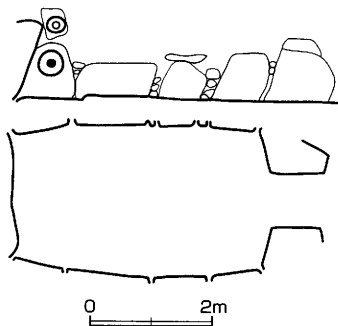
本稿では、このような視点から珍敷塚古墳の図文や関連する「蕨手文」についてその特徴を探り、あわせて中国漢代に出現した「羊頭」壁画との比較によって、両者の関係性について考察しようとするものである。

## 珍敷塚古墳の図文

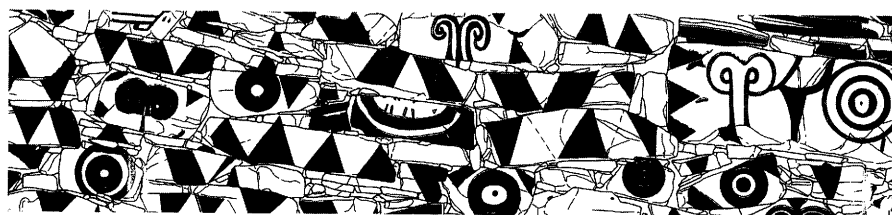
最初に、珍敷塚古墳の図文について見ておきたい（第1図-1）。調査に携わった森貞次郎氏の解説が基本とされている。やや長文になるが森氏による解説をここに引用したい。「二つの靫をいやくような蕨手文の右側に、さらに一つの靫をくわえたものを、壁画のほぼ中央に、巨大に壁画の大部分をふさぐ感じで描いている。靫の配置は、思いなしか、この石室が当初から、夫婦とその1人の肉親のためのものとして、計画された感じがしないでもない。さらに、この中央の図形の両側に、やや小さく繊細な図形を配置している。左側には太陽と見うる同心円の下に、へさきに鳥をとませた小舟を描いている。舟の上には前方に帆をあげ、靫を手にした人物が乗っている。それは尖った冠帽だけを赤であらわし、身体の一部は、岩肌の色を残すという巧みな表現をしている。また右側には、上方から下方にかけて、盾をもつ人物・円形・上と前から見た2種のヒキガエル・箱状のものにとまる鳥らしいものを描いている。ヒキガエルを月の象徴として用いることは山上憶良の



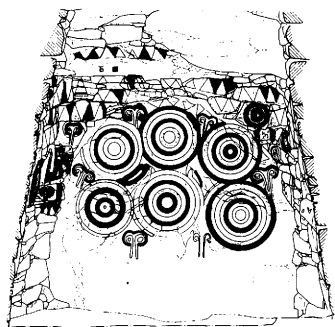
1. 福岡県珍敷塚古墳・奥壁



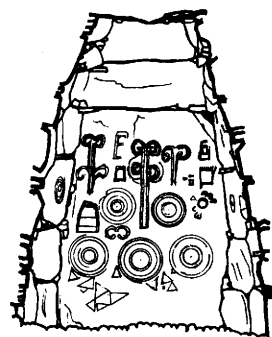
石室略測図



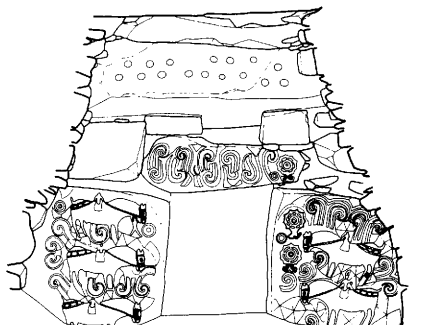
2. 福岡県日ノ岡古墳・側壁



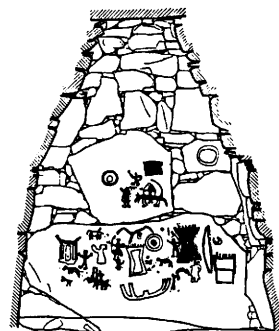
3. 福岡県日ノ岡古墳・玄室奥壁 0 1m



4. 福岡県塚花塚古墳・奥壁 0 2m



5. 福岡県王塚古墳・前室奥壁 0 2m



6. 福岡県五郎山古墳・奥壁

第1図 日本列島の「蕨手文」を有する壁画古墳

「貧窮問答歌」にも「クニグニのさわたるきわみ」として表現されており、古くから中国の伝統をうけた高句麗古墳の壁画にも、月をあらわす図像として、しばしば見るところである。大陸的な表現が、すでにこの時代の葬送思想のなかにはいりこんでいたことをしめすものといえよう。神話の天の鳥船を思わせる船・太陽・月などの絵画は、死者の霊を死後の世界に送り、安住させようとする葬送儀礼の表現であり、死者にたいする永遠の生活の安息のための供献でもあったであろう」としている<sup>(8)</sup>。

今日の珍敷塚古墳壁画の検討は、森貞次郎氏が1964年に行ったものを基本として行われている。解説内容は微細にはなっているが、壁画の主題が森氏解説からほとんど進展していないようである<sup>(9)</sup>。それは壁画の中央に描かれた大形の「蕨手文」への解釈が欠落していることに主因があるためと思われる<sup>(10)</sup>。

### 「蕨手文」と古墳

珍敷塚古墳（6世紀後半）以外に蕨手文を有する古墳は福岡県域の筑後と筑前など有明海沿岸地域に多く見られる。ここでは、そのうちの代表的なものを紹介しておきたい。

日ノ岡古墳（6世紀初頭）（第1図—2・3） 福岡県うきは市吉井町に所在する。壁画系装飾古墳としてもっとも早い段階の古墳として知られている<sup>(11)</sup>。単室構造の横穴式石室を有し、玄室および羨道の壁面全部に赤・白・緑・青の4色で彩色壁画が描かれている。同心円文と連続三角文とが目立つが、随所に蕨手文が配されている。とりわけ留意したいのは、蕨手文が玄室奥壁では、おそらく日輪や月輪を示すであろう同心円文の周囲を取り囲むように描かれていることである。それは同心円文の、弧が重なり合う間にあって、上・下・左・右に配置されている。また、側壁部では、船形や連続三角文の上方に配置される傾向がある。

塚花塚古墳（6世紀後半）（第1図—4） 福岡県うきは市吉井町に所在する。複室構造の横穴式石室を有する。後室奥壁に、5個の大きな同心円文と巨大な蕨手文が描かれている。蕨手文について「辟邪の図文」と指摘されている<sup>(12)</sup>。ここでの蕨手文は、同心円文の上位かつ中央に置かれていることに留意したい。

王塚古墳（6世紀前葉）（第1図—5） 福岡県桂川町に所在する。壁画系装飾古墳として日ノ岡古墳に続く古さをもつ。複室構造の横穴式石室を有する。玄門を構成する袖石、楣石、冠石の前面一面に図文が描かれている。人物騎馬像を主文とし、周囲に双脚輪状文、蕨手文、同心円文、三角文が描かれている。とりわけ右側の袖石の騎馬は、周囲を明瞭な蕨手文に囲まれており、典型的な大型の蕨手文が馬頭部上方に2組描かれている。左側の袖石の騎馬は、あたかも蕨手文で囲まれた環状世界を歩駆しているかのようにも見える。ここでの蕨手文について、王塚古墳の研究を進める柳沢一男氏は「辟邪の図文」と見ており、「騎馬群像は中国の壁画や画像石、高句麗壁画の出行図や進軍図にしばしば登場する。

これらと表現の違いはおおきいけれども、王塚の騎馬群像はこうした構図を下敷きにした可能性が高い」としている<sup>(13)</sup>。

五郎山古墳（6世紀後半）（第1図-6） 福岡県筑紫野市に所在する。複室構造の横穴式石室を有する。壁画は奥壁に、二段に分かれて描かれている。下段の上位に中央に翼を広げたようなY形画像が展開している。右には同心円文があり、下方には盾と思われる図像がある<sup>(14)</sup>。Y形画像は、その位置が珍敷塚古墳と類似しており、いわゆる蕨手文が崩れた文様とすることができよう。五郎山古墳の構図は、同心円文や盾、舟形など珍敷塚古墳と組成に共通するものがある。五郎山古墳は、珍敷塚古墳の描く「黄泉の世界」をより詳細に語ったものとする事ができよう。

### 中国の羊頭壁画と画像石

中国の主に漢代の壁画や画像石の構図に、「羊頭」が描かれることがある。それは日本壁画の「蕨手文」と似た様相を示す。それらは西漢（＝前漢）後期（紀元前48～紀元8年）に比定される「第2期の壁画墓」<sup>(15)</sup>段階に盛行する。次に管見にのぼった具体例を記したい。

洛陽焼溝61号漢墓（第2図-1） 西漢後期の元帝～成帝の間（紀元前48～前7年）に属する。磚室墓で、墓道、墓門、副室、前室、後室の5部分から構成される。後室には角杯をもった人物が描かれ「楚漢戦争」の“鴻門宴”の場面とされている。墓門の上額部に羊頭が描かれている。その下位に、猛虎が裸女の肩部に前足をかけている図がある。裸女の衣がそばの樹に掛けられている。この樹木を桃樹や扶桑とする見方がある。これらを基に、この図は「虎吃早魃」（神虎が早魃神を食べる）だとされている。また郭沫若氏は、「苛政猛于虎」（苛酷な政治は虎よりもおそろしい）を表現していると説いている。この壁画の意味について賀西林氏は、「画面の図像は、神虎驅邪の信仰と扶桑神話が融合した」ものとしている<sup>(16)</sup>。この図文の真上に大きく両眼を見開いた羊頭が描かれている。

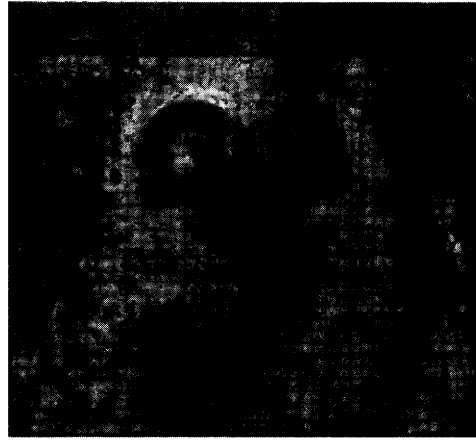
洛陽“八里台”漢墓（第2図-2・3） 洛陽焼溝61号漢墓と同じく西漢後期に属する。壁画は墓室前面の山壁に描かれている。中央に大きく「羊頭」が置かれている。左右の斜面壁画には冠帽を被った高位の人物がひととき多く描かれ、右斜面の人物は従者から斧を受け取ろうとしている。左斜面の人物は左手に小枝（瑞草?）を持っている。左右の人物の顔の表現は同じで、同一人物を左右で描き分けしたものと思われる。下層の台部壁画には右から左に向かって歩む多くの人物が描かれている<sup>(17)</sup>。

この壁画の解釈には、「貴族生活図」、「上林苑中格斗的景象」（『史記』司馬相如伝「上林賦」の様子）、「祭神礼儀相關的活動」、『後漢書・礼儀志』の「上陵」あるいは「会陵」の迎客拜謁の描写、「孝子事親尽礼」などの諸説がある。

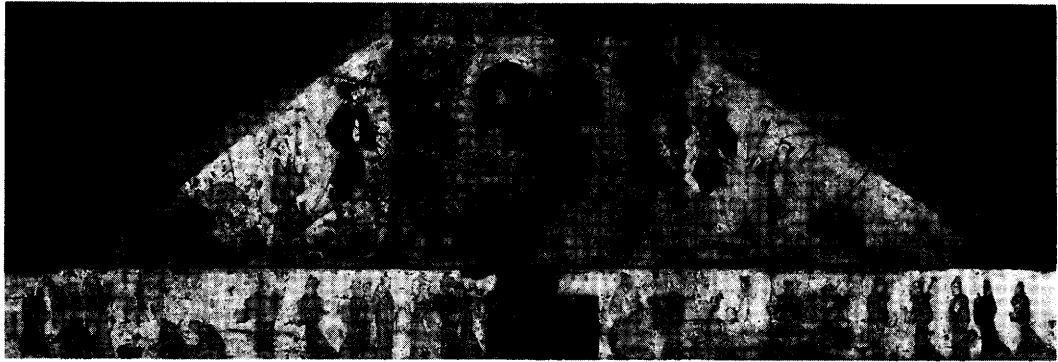
この壁画を前述した佐原真氏の「特定画像の拡大」の文法に当てはめると、主題は中央



1. 洛陽燒溝61号西漢墓壁画



3. 洛陽“八里台”西漢墓壁画(扩大)



2. 洛陽“八里台”西漢墓壁画

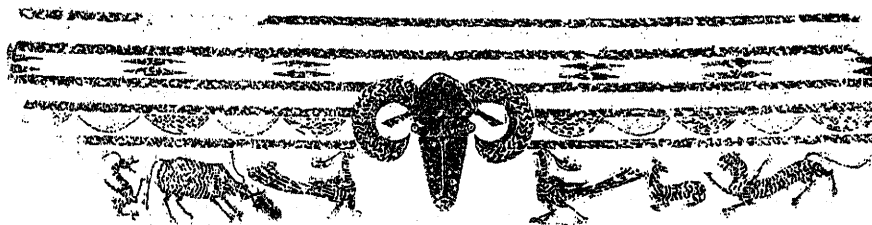


4. 咸陽興家灣1号漢墓壁画



5. 淄博張庄墓画像

第2図 中国の「羊頭」壁画と画像(1)



1. 肥城北大留漢墓画像



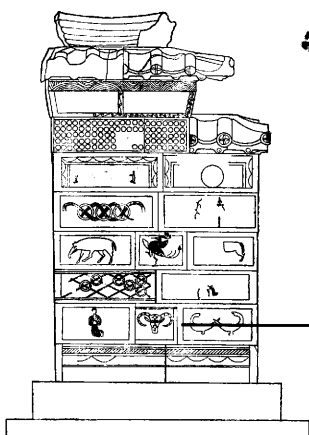
2. 武威磨嘴子漢墓壁画



3. 臨沂吳白庄漢墓画像



4. 濟寧城南張漢墓画像



5. 河南登封嵩山太室闕東闕南面画像



羊仙 (拡大)



羊車 (拡大)



(拡大)

第3図 中国の「羊頭」壁画と画像 (2)

に描かれた「羊頭」にある。次いで、それを目指して両方（左右）から斜面を登る二人の人物（おそらく同一人であろう）がメインとなる。この人物は本墓の被葬者の可能性がある。山の頂に「羊頭」が配置されていることに留意したい。

咸陽龔家湾1号漢墓（第2図-4） 新莽期（紀元9～23年）に属する。三重目の石門の入口上部に描かれている。賀西林氏の解説では、「画面の正面には羊頭が置かれ、その周囲を雲がめぐる。右側は三本の横線でもって画面を上下に二分する。下位には、連綿とつづく山の峰がある。上位には山形冠を被った人物が肘掛に寄りかかって座っている。この人物は大きく描かれており、側面の4分の3を占める。人物の背後に一本の樹があり、前には小人と大きな口ウソクと仙菓を搗く兎が描かれている。羊頭の左側には、右側の山形冠人物と相対する位置に正面を向いた人物が描かれている。後ろには一本の樹がある。発掘簡報によれば、この人の側にはもう一人正面を向いた人物が座っている。ただし画面は不鮮明であるので認識できない。この壁画表現は仙界図像とすることができる。図中の諸神について定説はない。画面には色彩は施されておらず、すべてが単線で白く描かれている」とある<sup>(18)</sup>。

淄博張庄漢墓画像（第2図-5） 漢代に属する。大型の磚石混合墓で、全長13.4mを測る。墓道、墓門、前室、中室、後室、右側室、左側室、左後側室の計8部分から成る。画像石は墓門の横額（門楣）に配置されている。画像の中央高位に大きな角を巻いた「羊頭」が浮き彫りにされている。その下には、「車馬迎帰」の風景がある。門框の右に青龍が左に白虎が、門扉の正面には朱雀、門扉の吊り下げ金具には双鯉魚が配されている。これらは、辟邪と「門吏迎候」（門番の役人が客人を迎える）を表現したものとされている<sup>(19)</sup>。「羊頭」は、門楣の中央で、あたかも墓の主人を外部の進入者から守るように置かれている。辟邪の意味を有すると解釈するのにふさわしい威容を示している。

肥城北大留漢墓画像（第3図-1） 張從軍氏の研究書に記載されている資料である<sup>(20)</sup>。漢代に属する。墳墓の詳細は不明だが、「墓門の門楣あるいは出入り口の横梁の中間に一匹、あるいは多くの羊頭が浮き彫りされている。臥鹿は一頭あるいは二頭が門楣に配されている」とある。中央に大きく「羊頭」を置き、左右に朱雀や麒麟、鹿、虎と思われる仙獣を配置した構図である。ここでも「羊頭」は中央に大きく彫られている。

羽人と羊・羊車 壁画や画像石に「仙人」と「羊」との関わりを表現したものがある。武威磨嘴子漢墓壁画（第3図-2）は、墓室の天井に日輪と月輪と流雲が描かれている。西壁には5人の人物と1羽の鳥が配され、南壁には羽人が羊と戯れる図像が見える。羽人は、長髪を後頭部で巻き下げ、手に芝草（不老不死の薬草）を持っている。それと大きな角を有する山羊が描かれている<sup>(21)</sup>。

臨沂吳白庄漢墓画像（第3図-3）は、羽人が羊に乗る構図である。羽人は自由に天界を飛翔することができる仙人である。それは昇仙を果たした人である。その乗物として羊が



描かれているのである<sup>(22)</sup>。

濟寧城南張漢墓画像（第3図-4）は、羊仙に導かれて、画像の主人公である山形をした冠を被った人物を乗せた鹿車そして羊車、続いて鹿車が疾走する構図を描いている。これは死後、天堂に昇り、すでに仙人となって神仙世界に入った場面を描いているとされている<sup>(23)</sup>。

河南登封嵩山大室闕東闕南画像（第3図-5） 東漢中期の元初5年（紀元118年）に築かれたもので高さ3.92mを測る。これは宗廟闕として設置されたものである。東闕南面に画像が認められる。それらは「拜謁、車馬出行、劍舞、倒立、犬追兔、鋪首街環、馬、熊、四神と各種花紋図案など」の内容を示している<sup>(24)</sup>。

### 「羊角」を抱いて天門に入る

このように中国漢代や新莽期の墳墓に「羊」や「羊頭」をテーマとした図像が盛行する。壁画や画像石において、それらは墓門の門楣の中央に一際大きく象徴的に配置されている。「羊頭」の装飾を配することについて、張從軍氏は①辟邪、②昇仙、③孝道の意味、の目的があったとしている<sup>(25)</sup>。中国古典で羊を瑞獣とするものがある。『大平御覽』が引く「春秋説題解」には「羊者、祥也」（羊は吉祥なり）とある。また「水之精為玉、土之精為羊」とあるように、水の精を玉に、土の精を羊に当てる解説も見られる。

張從軍氏は「成仙之道」で、仙人の多くは尖った角帽やY字形の鬚をたくわえていて、胡人を形容していると述べている。羊や鹿に乗るのは胡人の生活に欠かせないことであったからともしている<sup>(26)</sup>。「臨沂呉白庄漢墓画像石」や「濟寧城南張漢墓画像石」では、羊や鹿は「成仙之道」への乗り物として描かれている<sup>(27)</sup>。

なぜ仙人が羊に乗るのであろうか。それは羊角が有する呪性に関係すると思われる。中国、前漢の哲学書である『淮南子』「愿道訓」に次のような記述がある<sup>(28)</sup>。

「昔は馮夷・大丙の御するや、雷車に乗り、雲蜺を六とし、微霧に遊び、怳忽に驚せ、遠きを歴、高きに彌りて、以って往くことを極む。霧雪を経ふれども迹無く、日光に照らさるれども景無し。扶揺に珍し、羊角を抱いて上り、山川を經紀し、崑崙を踏躋し、閭闔を排き、天門に淪る。末世の御は、輕車・良馬・勁策・利鑿有りと雖も、之と先を争うこと能はず」

ここに「羊角を抱いて上り」と書かれている。この部分を、楠山春樹氏は『新釈漢文大系本』（明治書院）で、「つむじ風に乗じて上り」と通釈されている。しかし、私考ではここは文字どおり「羊の角を抱いて上り」と解した方が良いと思っている。「羊角」と「つむじ風」を重ねたのは「火急すみやかに成せ」といった意味が重ねられてのこととも思われる<sup>(29)</sup>。「羊の角を抱くこと」、そのことに天門へ至る働きが期待できるのである。

ここは、「羊の角を抱いて、山を越え川をわたり、高く崑崙山に至り、閭闔の門をおし

ひらき、さらに天門の中に入る」とするのが本意に近いと思われる。ちなみに「馮夷・大丙」は、楠山春樹氏の語釈によれば、「両者とも、道を得て陰陽を御する者」とされている。この主意を“陰陽を御する者が羊角を抱いてこそ、崑崙山に至り、天門に入ることができる”と解したい。

中国、戦国時代の思想書である『莊子』「逍遙遊篇」では、「鳥あり、其の名を鵬と為す。背は泰山の若く、翼は垂天の雲の若し。扶搖に搏ち羊角して上ること九万里、雲気を絶（超）え青天を負いて然る後に南を図り、且に南冥に適かんとするなり」とある<sup>(30)</sup>。有名な大鳳の一節である。

この通釈は、「[さてこの大鳳は、]はげしいつむじ風にはばたきすると、くるくる螺旋を描いて九万里もの上空に舞い上り…」とされている。金谷治氏の語訳では「扶搖」を「つむじ風」の意味にとっており、「羊角」を「くるくる螺旋を描いて」と訳している。この訳は、羊の角の外形的特色からと思われる。しかし、ここに「羊角」が現れるのは呪性の意味が込められてのものと思われる。私は、ここは「羊角の威力によって」と解した方が、より本意に近くなるであろうと思っている。

要するに、『淮南子』「愿道訓」や『莊子』「逍遙遊篇」で語られている「羊角」は、「仙界」への乗り物としての意味が託されている可能性が高いと見ている。

墓門に羊頭や臥鹿が描かれる場合がある<sup>(31)</sup>。洛陽“八里台”漢墓や咸陽龔家湾1号漢墓では、羊頭は構図の中で山峰の上方や山頂に大きく描かれている。羊頭は高山に配置されている。高山は神仙の山に比定できよう。前述したように『淮南子』「愿道訓」に「羊角を抱いて上り、山川を經紀し、崑崙を蹈躋し」とあって、羊角を抱いて昇る先を「崑崙山」と記している。

崑崙山は、中国古代において、人々の格別高い崇拜を集めた神話伝説上の神山である。羊頭は、山上に昇り詰めた最上位に記されている。このことから壁画に描かれた山峰は崑崙山に見立てられていた可能性がある。

ところで、曾布川寛氏は、『史記』大宛伝の司馬貞「索隱」注は、「括地図」を引用して、[崑崙の弱水、龍に乗るに非ずんば、至れず]と記することから、崑崙山に至るためには、龍が唯一の乗物であったとしている<sup>(32)</sup>。しかしながら、ここで述べたように「羊角」もまた、崑崙山へ至る乗物の性格を有していたとすることができよう。このように複数の手段が予想されるのは、時代や古典の論旨による振幅があるためであろう。もちろん「羊頭」は、「羊角」を象徴するものとして描かれたであろうことは言うまでもない。

### 羊頭の変容としての蕨手文

ここに中国漢代に出現した「羊頭壁画」や「画像石」の様相を一瞥し、あわせてその意義について試考を述べた。このような中国の墓室における壁画の「羊頭」の様相は、日本

古墳時代の「蕨手文」の在り方と酷似している。

蕨手文は福岡県の珍敷塚古墳（第1図-1）、日ノ岡古墳（第1図-2）、塚花塚古墳（第1図-4）、王塚古墳（第1図-5）では壁画の中央に大きく描かれている。それらは日輪（太陽）や月輪（月）の象徴と思われる同心円文の上位に配置されている。このことは、蕨手文が意味するところは太陽や月よりも遥か彼方にあるということを示唆している。また、日ノ岡古墳・玄室奥壁（第1図-3）では同心円文の前や後ろに蕨手文が描かれている。これらから、蕨手文は太陽や月よりも上位の役割を担っていたとすることができよう。いずれにしろ、これらの古墳の墓室のもっとも重要な位置に置かれているのが蕨手文である。

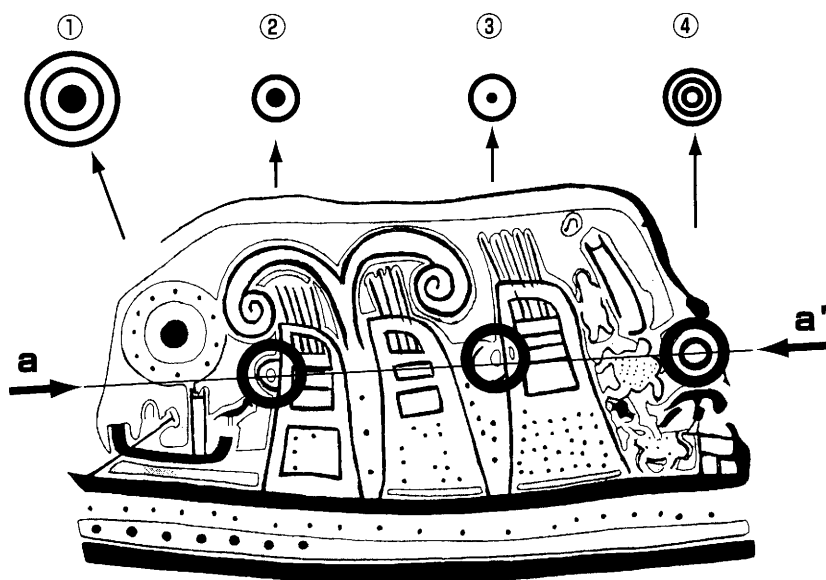
この配置は、中国の壁画墓の羊頭が墓門の上に置かれているのと同様の在り方を成す。彼我のそれは大きく中央に置かれることで同様にシンボリックであるし、珍敷塚古墳（第1図-1）と洛陽焼溝61号西漢墓（第2図-1）や洛陽“八里台”西漢墓（第2図-2）淄博張庄墓（第2図-5）を見比べると、蕨手文と羊角との類似性は一目瞭然である。

このことから私考では、「蕨手文」は「羊頭」をデフォルメしたものと解している<sup>(33)</sup>。この比定が正しいとすれば、珍敷塚古墳の「蕨手文」の描き手は、何等かの形で中国漢代の「羊頭壁画」の神仙思想を理解していたことになる。描き手は、墓の主人公の注文に応じて描いたと思われるので、それは墓の主人が有していた思想と言いかえることができる。船に乗る人物が「尖った冠帽だけを赤であらわし」とされているのは、張從軍氏が「仙人の多くは尖った角帽やY字形の鬚をたくわえていて、胡人を形象している」と指摘していることを想起させる。つまり珍敷塚の主人公は、「羊角」による昇仙思想を壁画の主題にしていたと考えられる。

珍敷塚古墳の中央には、羊角（蕨手文）のほかに3つの鞆が象徴的に描かれている。鞆は辟邪の意味を持って描かれたとするのは、多くの論者の説いているところである。仔細に構図をみると羊角（蕨手文）は、2つの鞆の間からでている。日下八光氏の模写図によれば蕨手文から連続する朱列点が2つの鞆の間にあることが分かる<sup>(34)</sup>（なお、第1図-1では鞆の間に3個の列点が記されているが、これは調査初期のものを使っているためである）。つまり2つの鞆の間には、蕨手文の根があり、かつ2つの鞆の間が開いているという設定で描かれている。

ここで、もう一度『淮南子』「愿道訓」を見たい。そこには「羊角を抱いて上り、山川を經紀し、崑崙を踏躋し、閻闔を排き、天門に淪る」とある。羊角が上り至ったところは崑崙山であり、終局的には「閻闔を排き、天門に淪る」ことを目的としている。珍敷塚古墳の鞆は、辟邪の意味とともに「天門」を兼ねてここに描かれたのではないだろうか。

本図文を、多くの研究者が支持しているように、「死者の霊を死後の世界に送り、安住させようとする葬送儀礼の表現」<sup>(35)</sup>と見ることに異論はない。太陽を表現する大きな同心円文が左に置かれ、右端には月世界を象徴するヒキガエルとともに小さな同心円文が描



第4図 福岡県珍敷塚古墳壁画の同心円文(図中に○印表示)とその模式図(①～④)

かされている。左端に置かれた「天の鳥船」が右側へと舳先を向けている。太陽が東に昇り西に沈む。西には黄泉の世界がある。

日下八光氏による模写復元図では、左端に大きく描かれた太陽は同心円の中心核は赤で塗りつぶされその周囲を青円で囲んでいる。そして、右端の月は中抜き(中心核は褐色で周囲の地の色と同じである)で赤円の外周を青円がめぐっている。ここで留意したいのは、第4図に②、③とした同心円文である。②は靱に円の半分が隠れていて不分明さは残すが、中心核に青が配色されている。③は②と配色構成は同じであるが、中心の青核が小さく見えるような構図となっている。

①の太陽表現の配色構成が、②と③では青色が中心核に置かれていて、逆転している。②と③と④は、第4図(a-a')に示したようにほぼ等間隔で同一水平面に置かれている。このことは②と③が太陽から月へと変化していく過程を示すと思われる。つまり同心円文の配置を「左①」の太陽世界から②、③を経て「右④」の月世界へと推移する時間の経過を現わしていると解したい。

3つの靱のうち中央と右端の間がやや開いている。その間に同心円文が描かれており、そばの靱はひととき大きく描かれている。これは昇仙にとって最後の関門となる「天門」を押し開いた光景と見ることができる。「天門」の背景に、太陽が月へと変容していく姿を描いたとするのは想像が過ぎようか。筆者は、珍敷塚古墳の壁画には、このような昇仙物語ともいべきメッセージが托されていると考えている。

## 壁画古墳の系譜と問題点

ここで、問題となるのは彼我の年代差である。珍敷塚古墳は6世紀後半（紀元550～600年の間）の築造とされている。一方、中国の羊頭壁画は、西漢後期（紀元前48～紀元8年）や新莽期（紀元9～23年）に盛行している。おおよそ500年近い年代差を有している。

珍敷塚古墳の壁画には、同心円文による太陽表現やヒキガエルによる月表現があることから、同様の壁画古墳を有する高句麗古墳との関係が説かれてきた。管見では、蕨手文について高句麗古墳での存在は知られていないようである。それが事実だとすれば、6世紀初頭の日ノ岡古墳や6世紀後半の珍敷塚古墳などの蕨手文や図文に、中国漢代や新莽期の「羊頭」壁画の文化が影響を及ぼしていることとなる。

私考では、日ノ岡古墳や珍敷塚古墳には、中国の「羊角」思想の投影があると見ている。しかしまた、異なる面もある。それは、「羊頭」から「羊角」へのデフォルメが見られることである。あるいは「羊角様」へのモチーフ化といっても良いかもしれない。このことは「羊」を具体的に知らない地域の人々（あるいは故地を離れた人々の末裔）によって描かれた可能性を示唆している<sup>(36)</sup>。

中国漢代では、羊頭と墓主人公の物語が、墓門や墓室で描き分けられている。それが、日本では古墳奥壁に集約して描かれているようである。それでいて、前節で第4図を解説する中で示唆したように、描き手は短縮され省略された中でも①から④へと太陽が推移（船の人物の黄泉の世界へと移動する方向でもある）する昇仙思想を物語っている。それを描く目的の本筋は外していないと解される。

このことに関連して白石太一郎氏は註(5)で、「ヒキガエルや四神の知識を断片的に受け入れ、古墳の壁画の一部に取り入れているにすぎない、決して、中国や高句麗の人々の来世観や宇宙観を体系として受容したわけではない」としている。ここに彼我の図文を比較して見てきた今、「断片的知識」ととらえることに躊躇せざるをえない。羊頭と蕨手文が全体構図の中で占める位置（つまり基本思想）に一貫性が看取できるからである。共通して、もっとも重要な位置に、もっとも大きく描かれているのである。

日本列島における羊角への変容は、本来の思想が年月を隔てて細部風化したことによるためと思われる。細部は失われたとしても中核を成す思想は脈々と継承されていて、高句麗からの影響などによる壁画古墳の隆盛を契機として復活したと考えるのである。その担い手は、中国漢代や新莽期の昇仙思想を伝える末裔なのかもしれない。胡漢抗争や五胡十六国の盛衰、隋による陳の攻伐などによって、中国中枢地域から多くの人々がアジア各地へと流出していったのは中国史では周知の事実である<sup>(37)</sup>。それらの波の中に列島への渡来人が入っていたのは想像に難くない。

たとえば延暦寺を開いた平安前期の僧、最澄（766/767～822年）の父は三津首百枝

とされる。三津首氏は後漢の孝献帝の後裔と称する渡来系氏族である<sup>(38)</sup>。群馬県多野郡吉井町にある「多胡碑」には、和銅4年(711年)に多胡郡が新設されて、その郡司が任命されたことが記されている。そこには「郡成給羊成多胡郡」とある。「羊」を人名と見て、「多胡郡」を「羊に給す」とする解釈が一般に周知されている。ただし、高島英之氏は「羊」を「蓋(けだし)」の略字であるとみている<sup>(39)</sup>。

この場合には、多胡碑が「羊氏」とは無関係となるが、ここで想起されるのは張從軍氏が「仙人の多くは尖った角帽やY字形の鬚をたくわえていて、胡人を形象していると述べている」ことである<sup>(40)</sup>。そこでは「胡人」と「羊」との密接な関係が説かれている。もし「多胡」が「胡人」(集団)と関係するものであるなら、ここは通説のように「羊」と呼んでおいても違和感がない。

また、奈良時代の史料に、人名としての「羊」は、「羊麻呂」「子羊」「羊女」などを含めて89例が知られている<sup>(41)</sup>。このことは奈良時代の列島に「羊」に関わる渡来系氏族が多数入り込んでいたことを示している。

日ノ岡古墳や珍敷塚古墳などに「羊角」思想が開花した6世紀に、「羊」系渡来人が有明海沿岸地域にコロニーを設けていたとすれば面白い。彼らが故国で伝承していた「羊角」思想を高句麗の壁画古墳の影響を受けて倭国で具現化したとすることができよう。なお、このことについての検討は今後の課題としたい。

要するに、日ノ岡古墳や珍敷塚古墳などの墓主は、「羊角」「羊頭」を抱くことで、①辟邪、②昇仙、③孝道、これらが果たせると解した地域からの渡来人であり、また、そのような思想を認識し得た階層人の後裔であったと推考するものである。

## おわりに

本稿では、珍敷塚古墳の壁画の蕨手文が、中国漢代に出現、盛行した「羊角」による神仙思想を反映しているとした。これまで、この壁画について、断片的な知識の借用と見なされてきた。しかし、私考では日本的な石室構造の中に、神仙世界への道程やその思想の本筋が見事に示されていると解した。

彼我の大きな年代の相違については、「末裔」による構築とすることで説明ができそうである。これについては、今後、渡来氏族の研究者や九州地域の微細な地域学の成果から学ばなくてはならないと思っている。

ここでは珍敷塚古墳壁画の解釈について従来説を越えた冒険的考察を行った。執筆を通して、日本列島の壁画・装飾古墳を見つめる視点は、これまでの朝鮮半島ばかりか、より広く大陸を含めて展開されなくてはならないと痛感した。先入観を取り去って再検討することで、新しい歴史像の構築にも寄与すると思われる。本稿が、これらの見直しに、いくらかでも資するところがあれば嬉しい。

筆者は、中国考古学や神仙思想について、これまで深い研究を行ってきたわけではない。学界周知の重要な論考を失念している可能性もある。すでに検討済みの論点もあるかもしれない。それらの不備について大方の御教示とご批正をいただければ幸いである。

## 註

- (1) 町田章『古代東アジアの装飾墓』同朋舎出版、1987年／250頁。
- (2) 斎藤忠『壁画古墳の系譜 日本考古学研究2』学生社、1989年／121頁。
- (3) 註(1)に同じ。
- (4) 西谷正「北部九州の装飾古墳とその展開」『東アジアの装飾古墳を語る』雄山閣、2004年／33～34頁。
- (5) 白石太一郎「装飾古墳における他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告 装飾古墳の諸問題』第80集 国立歴史民俗博物館、1999年／88頁。
- (6) 柳沢一男氏は、「謎の蕨手文」（『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』新泉社、2004年／53～55頁）と題して、「唐草文を源流とする斎藤忠説、漢代壁画の芙蓉樹（仙界の生命の樹）を象徴化したとする岡本健一説、あるいは『万物を呑みこみ、永遠の拡張（生）を続ける図形、（中略）永遠を象徴する』（『黄泉国の古代学』）渦巻き形の図文とする辰巳和弘説などがある」と解説している。柳沢氏は、弥生時代の銅鐸や壺の口縁部にスタンプされたものもあるとして、蕨手文は「古くからつながっている」図文であると指摘する。これらが、現状の蕨手文に関する主要な推考である。
- (7) 佐原真「古墳時代の絵の文法」『国立歴史民俗博物館研究報告 装飾古墳の諸問題』第80集 国立歴史民俗博物館、1999年／10・22頁。
- (8) 森貞次郎「9珍敷塚古墳」『装飾古墳』平凡社 1964年／60～61頁。
- (9) たとえば、石山勲「11. 福岡県珍敷塚古墳」『装飾古墳の世界 図録』朝日新聞社、1993年など。
- (10) もちろん微細な観察は行われている。福島雅儀氏は、「原田大六による唐草文説、森浩一による早蕨模倣説などがある。蕨手文の形状は、小林行雄や日下八光によって整理されている。小林行雄は『単独で用いることも絶無ではないが、ふつうは二個並置して描くことが多い。二個を並置する場合にも、渦文を外側に配置して直線部が並行するものと、渦文を上下転倒したものとがある』とし、『彩色法からいえば、一色で渦文を描くものよりも、二色で二重の渦形を描く方が多い』とその特徴をまとめている」と解説している（「福島県の装飾横穴」『国立歴史民俗博物館研究報告 装飾古墳の諸問題』第80集 国立歴史民俗博物館、1999年／164頁。）
- (11) 註(5)に同じ／79頁。
- (12) 森貞次郎『装飾古墳』教育社歴史新書、1985年／80頁。註(5)に同じ／79頁。
- (13) 柳沢一男『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』新泉社、2004年／49頁。
- (14) 森貞次郎『装飾古墳』教育社歴史新書、1985年／113頁。
- (15) なお、洛陽地区で「第1期の壁画墓」に属する最も古い壁画は、西漢墓ト千秋壁画墓である（洛陽市第二文物工作隊・黄明蘭・郭引強『洛陽漢墓壁画』文物出版社、1996年／11頁）。墓道と主室と左右副室の3部分構成を成す。壁画は主室の天井部と側壁とに描かれている。日輪や月輪、青龍、白虎、双鼻羊、方相氏などを描く。主題は被葬者であるト千秋夫婦の「昇仙」にあるとされている。
- (16) 賀西林『古墓丹青 漢代墓室壁画的発見与研究』陝西人民美術出版社、2001年／23頁。
- (17) 洛陽市第二文物工作隊・黄明蘭・郭引強『洛陽漢墓壁画』文物出版社、1996年／101頁。

- (18) 賀西林『古墓丹青 漢代墓室壁畫の発見と研究』陝西人民美術出版社、2001年／44～45頁。
- (19) 張從軍『黄河下游の漢画像石芸術（上）』齊魯書社、2004年／225頁。
- (20) 張從軍『黄河下游の漢画像石芸術（下）』齊魯書社、2004年／241頁。
- (21) 註（18）に同じ／95頁。
- (22) 註（20）に同じ／268頁。
- (23) 註（20）に同じ／268～269頁。
- (24) 蔣英炬・楊愛國『漢代画像石与画像磚』文物出版社、2003年／158～159頁。
- (25) 註（20）に同じ／244頁。
- (26) 註（20）に同じ／268頁。
- (27) 仏教經典の『法華經』「譬喩品第三」には、三車火宅の譬喩が記されている。三車とは、羊車、鹿車、牛車である。そこでは羊車は声聞乘に、鹿車は縁覺乘に、牛車は菩薩乘に譬えられている（坂本幸男・岩本裕訳注『法華經 上』岩波文庫、2004年／164頁）。また、空海は『般若心經秘鍵』「分別諸乘分（四）」で、「羊鹿の号、相連れり」としたためている（宮坂宥勝監修『空海コレクション2』ちくま学芸文庫、2004年／358頁）。語訳には、「『法華經』の「方便品」に説く三車（三種の車）のうち、声聞と縁覺の教えをそれぞれあらわす羊車と鹿車のこと」とある。羊車と鹿車とが「相連れり」とする空海の認識に、「臨沂吳白庄漢墓画像石」や「濟寧城南張漢墓画像石」に示されている古代中国の羊車と鹿車の残像をみることができる。
- (28) 楠山春樹『新釈漢文大系54 淮南子 上』明治書院、1985年／38～40頁。
- (29) 日本の奈良時代に出現盛行し現代も使用されている呪符「急急如律令」も同様の意味がある。呪符や昇仙世界への期待感が羊角にも托されているとみることができよう。
- (30) 金谷治訳注『莊子 第一冊[内篇]』岩波文庫、2004年／24～25頁。
- (31) 本文では「鹿」について考察しなかったが、「白鹿は、後漢の建寧三年（170年）に作られた李翕碑の祥瑞図にも登場するように、王に徳があると出現する瑞獸の一つであるが、また天上界を飛翔する際の乗物の一つでもあった」とされている（曾布川寛『崑崙山への昇仙—古代中国人が描いた死後の世界—』中公文庫、1981年／56頁）。
- (32) 曾布川寛『崑崙山への昇仙—古代中国人が描いた死後の世界—』中公文庫、1981年／37頁・58頁。
- (33) 美術史から裝飾古墳の研究を行っている辻惟雄氏は、「珍敷塚古墳の蕨手文も、鞆の間からぎゅっと抜き出た羊の角みみたいな、力強いかたちをしています」と述べている（「美術史からみた裝飾古墳」『裝飾古墳が語るもの—古代日本人の心象風景—』吉川弘文館、1995年／130頁）美術史家の眼は、すでに蕨手文に「羊角」の気配を感じておられる。
- (34) 日下八光氏による模写図は、『裝飾古墳の世界 図録』朝日新聞社、1993年／35頁などに掲載されている。
- (35) 註（1）・（8）に同じ。
- (36) 古代日本列島での羊について、「ヒツジと推定される文様は鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土の弥生時代の琴板に彫られた例があるが、飛鳥時代以前では皆無である。（中略）ヒツジそのものは推古朝にもたらされたことが文献に見えるが、当時、ヒツジを見たことがある人はほとんどいなかったであろう」と解説されている（清野孝之「考古資料に見る十二支の動物たち」『月刊文化財』平成18年1月号 第一法規株式会社、2006年／30頁）。
- (37) 川本芳昭『中国の歴史05 中華の崩壊と拡大』講談社、2005年など。
- (38) 「最澄」『日本歴史大事典2』小学館、2000年。



- (39) 高島英之『古代出土文字資料の研究』東京堂出版、2000年／371～395頁。  
(40) 註(20)に同じ／268頁。  
(41) 有富由紀子・稲川やよい・北林春々香「人名としての『羊』(比都自、比津自)の実例一覧」『東国石文の古代史』吉川弘文館、1999年。

#### 挿図出典

- 第1図-1、佐原真「古墳時代の絵の文法」『国立歴史民俗博物館研究報告 装飾古墳の諸問題』第80集 国立歴史民俗博物館、1999年／図86。  
第1図-2、佐原真「古墳時代の絵の文法」『国立歴史民俗博物館研究報告 装飾古墳の諸問題』第80集 国立歴史民俗博物館、1999年／図80。  
第1図-3、白石太一郎「装飾古墳にみる他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告 装飾古墳の諸問題』第80集 国立歴史民俗博物館、1999年／80頁。  
第1図-4、森貞次郎『装飾古墳』教育社歴史新書、1985年／80頁。  
第1図-5、白石太一郎「装飾古墳にみる他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告 装飾古墳の諸問題』第80集 国立歴史民俗博物館、1999年／83頁。  
第1図-6、森貞次郎『装飾古墳』平凡社、1964年／113頁。  
第2図-1、洛陽市第二文物工作隊・黄明蘭・郭引強『洛陽漢墓壁画』文物出版社、1996年／100頁。  
第2図-2・3、洛陽市第二文物工作隊・黄明蘭・郭引強『洛陽漢墓壁画』文物出版社、1996年／102頁。  
第2図-4、賀西林『古墓丹青 漢代墓室壁画的発見与研究』陝西人民美術出版社、2001年／45頁。  
第2図-5、張從軍『黄河下游的漢画像石芸術(上)』齊魯書社、2004年／224頁。  
第3図-1、張從軍『黄河下游的漢画像石芸術(下)』齊魯書社、2004年／241頁。  
第3図-2、賀西林『古墓丹青 漢代墓室壁画的発見与研究』陝西人民美術出版社、2001年／95頁。  
第3図-3・4、張從軍『黄河下游的漢画像石芸術(下)』齊魯書社、2004年／268頁。  
第3図-5、蔣英炬・楊愛国『漢代画像石与画像磚』文物出版社、2003年／158頁。  
第4図、第1図-1を基に加筆作成した。